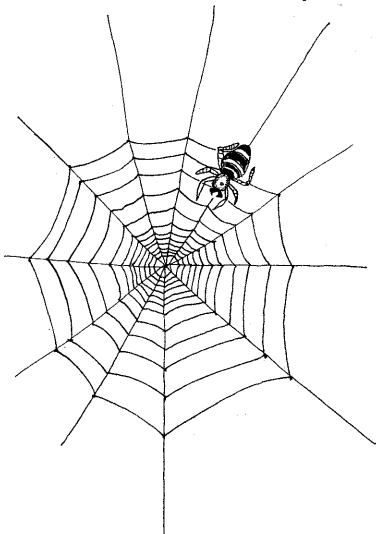


『芥川龍之介の“保吉”物 三国志』

山本 政人



大人が想像しがたい程のナイーブな感性を働かせながら相手を自分にとりこんでいく姿を見ることができたようです。それによって、日頃の小さな出来ごとを大切に受けとめられるようになったことはいうまでもありません。

児童文学に登場する子どもたちは、ある意味で、作者自身の内に潜む子ども像であること、大人の中

に在る子ども性をどう捉え、表していくかというところがテーマだとすれば、保育者も、自分とは違う子どもを発見しながら、じつは自分の中に息づいている子ども性を再認識していく、自己探究に他ありません。そういう意味に於いては共通のテーマでつながっている喜びを増幅していける世界であり、これからもたくさんの方の児童文学を読みたいと思っています。

(十文字学園女子短期大学)

今年は何川龍之介の生誕百年だそうだ。遠い過去の人のように思っていたが、まだそんなものだったのだ。きんさんぎんさんと同じ年齢なのである。いかに若くして死んでしまったかがわかる。

私が芥川を好む最大の理由は、その作品がどれも短いという点である。つまり読みやすいということである。彼の作品を読んだことのない人はあまりいないだろう。『羅生門』など初期の『王朝物』、『奉教人の死』などの『八切支丹物』、『杜子春』や『蜘蛛の糸』などの童話的なもの、『河童』や『歯車』などは、誰もが中学生ぐらいの時に出会ったことがあるだろう。彼の作品は短くだけでなく、テーマがはっきりとしており、それを表現する手法も実に巧みである。そして何といってもおもしろい。

しかしおもしろさとは別に、味わいのようなものが薄いように感じられる。そのためか、彼の作品には読み返してみたいと思うものがあまりない。作品の与える印象が鮮明で、あらためて読み返す必要を感じないのだが、何か軽い感じがする。余韻のような

ものがないのである。

そんな中で私が読み返してみたのは、保吉物と呼ばれる作品群である。芥川の最高傑作であるという人がいたり、駄作であるという人がいたりして、評価が分かれているが、私はいい作品だと思う。堀川保吉という主人公の周囲で起こった出来事を描いているのだが、若い時の芥川の人柄を髣髴とさせる作品である。

保吉物の中で一番いいのは『あばばば』という作品である。題名は変わっているが、ごくありふれた出来事を題材にしている。教師である保吉が立ち寄る食料品店で、店の奥さんと思われる若い女性が店番をするようになる。彼女が店の仕事に慣れず、とまどう姿を保吉はほほえましく見ていた。やがて彼女は姿を見せなくなり、ある日、赤ん坊を抱いた女性が店の前に立っていた。それはほかならぬその奥さんだったのだが……。

芥川作品はどれも短いので、じっくり読むものではないかもしれない。保吉物は文庫本には入って

いないようで、全集か作品集で他の作品と合わせて読むのがおすすめである。

長いものでおすすめというところ、『三国志』である。これも好みが分かれると思う。私は、最初読み始めた時は「なんだつまらない」と思ったが、一通り読んでみると読み返してみたくなくなった。今までに十回は読み返した。何度読んでもおもしろいが、それにはそれなりの読み方がある。読むたびに視点を当てて読んでみるのである。ある時は、関羽に焦点を当ててみる。女性に注目するのもおもしろい。「連環の計」の貂蟬や、徐庶の母親、孫婦人など、女性も大活躍なのである。

最近なぜかブームなのだが、三国志には物語の原点があるような気がする。日本では『平家物語』だろうか。さまざまな人物が登場し、善玉、悪玉入り

みだれてイベントが発生する。それには「桃園の誓い」、「三顧の礼」、「赤壁の戦い」といった名前がつけられ、それを聞いただけでその中身がわかるようになっていている。そしてよくいわれることだが、登場人物が個性的なのである。類型的といえはそうなのだが、登場人物がその個性ゆえに榮え、滅びていくさまは、ドラマというか物語である。

なお『三国志』といっても、吉川英治のや横山光輝の漫画などいろいろあるが、私のおすすめは岩波文庫のものである。

実は、芥川と三国志には、物語性という点において共通するものがあるのではないかと思っているのである。「事実が小説より奇なり」ではないが、身のまわりの出来事にこそ、物語があるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)